

平成三十一年（二〇一九）三月二十八日発行
『大倉山論集』第六十五輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

（第三十七回研究所資料展）

心の交流 タゴールと邦彦

星 原 大 輔

(第三十七回研究所資料展)

心の交流　タゴールと邦彦

星 原 大 輔

アジア初となるノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴール（一八六一―一九四一）は、最後の訪日となった昭和四年（一九二九）には、大倉精神文化研究所の創立者・大倉邦彦の自邸で約一ヶ月間滞在した。大倉が研究所設立の精神の一つに「東西文化の融合」を掲げたのは、この時のタゴールとの交流によるものであると考えられている。また、昭和三年（一九五八）、生誕百周年を祝うタゴール記念会が日本で組織された際には、大倉が理事長に就任し、タゴール研究室が研究所本館（現大倉山記念館）内に設置された。

こうした経緯もあって、当研究所はタゴールの関係資料を多く所蔵しており、これまでに第二十二回研究所資料展「インドの詩聖タゴールと大倉精神文化研究所」展（平成二三年度）、第二十九回研究所資料展「新発見！タゴールの自筆資料」（平成二七年度）を開催した。平成三〇年はタゴール記念会の発足から六十年目に当たることもあり、これまで展示した資料にその後収集したものを加え、大倉とタゴールの交流と日本とインドの友好交流の一コマを紹介

する研究所資料展「心の交流 タゴールと邦彦」を企画・開催した。期間は平成三〇年（二〇一八）四月二七日（金）から一〇月二五日（木）までで、会場日数は百二十八日、期間中の入場者数は延べ二千三百三十二人であった。なお本稿では、展示資料とキャプションをパネル順に掲げているが、掲載に当ってキャプションの一部に加筆修正を施した。

ごあいさつ

ラビンドラナート・タゴールは、インド・ベンガル州

出身の詩人・思想家で、アジア初となるノーベル文学賞を受賞した人物です。音楽・戯曲・絵画などでも豊かな才能を発揮し、彼の深い智慧と高い精神性は、世界中の人びとに強い影響を与えました。大倉精神文化研究所の創立者・大倉邦彦も、彼に影響を受けた一人で、研究所設立の精神の一つに「東西文化の融合」を掲げたのもタゴールの影響と言われています。

一九二九年（昭和四年）の来日では、タゴールは約一ヶ月間、邦彦の自邸に滞在し、帰国後も二人の交流は

続きました。また一九五八年（昭和三十三年）、生誕百周年を祝うタゴール記念会が日本で組織された際には、邦彦が理事長に就任し、タゴール研究室が研究所本館（現大倉山記念館）内に設置されています。

今回、タゴール記念会の発足六十周年を記念して、大倉とタゴールの交流を紹介する展示を企画しました。本展示を通して、タゴールが邦彦に与えた影響と、日本とインドの友好交流の一コマを知っていただければ幸いです。

一 タゴールとは

① インドの詩聖 タゴール

ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore : 一八六一～一九四一) は、一八六一年五月七日、ベンガル州コルカタの名門タゴール家に、十四人兄弟の末っ子として生まれました。一九一三年、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞しました。今日でも「詩聖(グウルウデーウ)」と呼ばれ、世界中から多大なる尊崇を集めています。

《展示資料》

・写真「タゴール十四歳」 沿革史資料No.6863-10

・写真「タゴール四十五歳」 沿革史資料No.6863-8

インドで仏画の制作と仏教美術の研究に従事していた、日本画家・勝田蕉琴(かつたしやうきん)(一八七九～一九六三)にプレゼントされたものです。シャンティニケトンのタゴール博物館館長クシティス・ローイは「この時期の写真

はたくさんはありません」と述べています。

・写真「タゴール七十歳」 沿革史資料No.6863-1

・写真「タゴールとガンディー」 沿革史資料No.6863-15
タゴールとマハトマ・ガンディーは、共にインドの国父と呼ばれています。二人は互いに尊敬し合い、生涯交流を続けました。「マハトマ」とは「偉大な魂」という意味の尊称で、タゴールがガンディーを最初にそう呼んだと言われています。

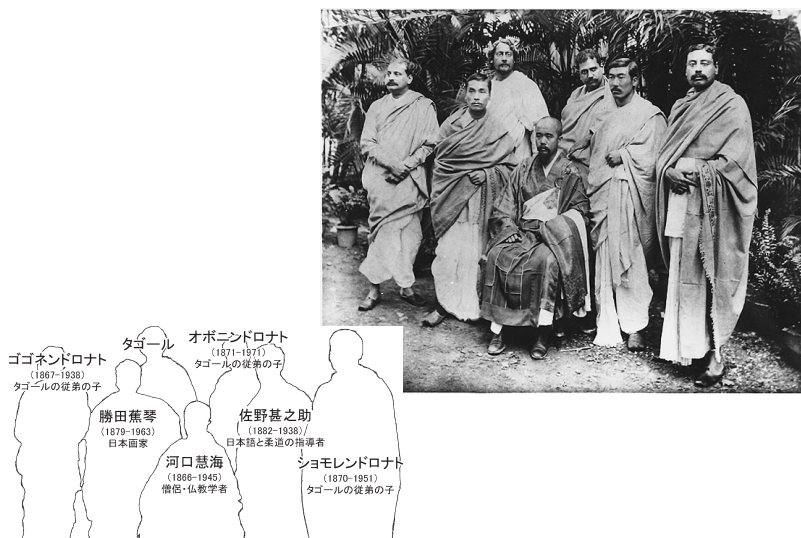
・写真「シャンティニケトンの自宅」

沿革史資料No.6863-16

日本から岡倉天心ら多くの人びとが訪ねています。一九六〇年まではタゴール国際大学本部、一九六一年からはタゴール記念館として使用されています。

・写真「自宅の庭園にて」(図一) 沿革史資料No.6153-13

一九〇五年(明治三八年)十一月、勝田蕉琴と河口慧海(かわぐちえ)が訪問した際に撮影されたものです。佐野甚之助は、タゴールの招聘でインドに渡り、シャンティニケトンの学園で日本語と柔道を教えた人物です。



【図1】 左の人名入りの輪郭図は、当研究所が『研精美術』106（美術研精会、1916年）の口絵を参考にして作成した。

② 詩人 タゴール

タゴールがはじめて作詩したのは十歳で、生涯で作った詩は約三千篇にもものぼると言われています。当時のインドはイギリスの統治下にあり、上層階級には英語教育が施されていました。しかし、タゴールはベンガル語の韻律を大切にし、作詩を行いました。そのため、タゴールの詩はいわゆる知識人だけではなく、一般民衆をも魅了しました。

《展示資料》

・詩集『捧げ物（ノイベッド）』

大倉精神文化研究所附属図書館蔵 エ1/88
一九〇一年（明治三四年）に刊行されました。タゴールがこの詩集に収録された詩を朗読した際に、父・デベンドロナトがいたく感動し誉めそやしたと伝えられています。ベンガル語の御音節単位型韻律法が多用されており、神秘主義的な世界観が表現されています。

・ベンガル語版『ギタンジヨリ』

大倉精神文化研究所附属図書館蔵 エ1/168

一九一〇年（明治四十三年）に刊行されました。タイトルの「ギタンジヨリ」とは「歌の捧げ物」の意で、神に訴える切々たる叙情詩が百五十七篇収録されています。この詩集について、タゴール研究の第一人者クリシュナ・クリパラニは、「恐怖のために、すべての人々の心に押し殺されていた国民の悲痛な叫びに、声を与えた」と賛辞を送っています。

・英語版『ギタンジヨリ』

大倉精神文化研究所附属図書館蔵 エ／＼

一九一二年（大正元年）にイギリスで刊行され、ノーベル文学賞を受賞した作品です。収録された詩は、タゴールがベンガル語の詩を自ら英訳したものです。全百三篇のうち五十篇が、左のベンガル語版『ギタンジヨリ』から選ばれています。ただし、タゴール自身が、ベンガル語版を「歌」、英語版を「散文訳」と表現しているように、表現方法も世界観も大きく異なっています。

③ 音楽作家 タゴール

タゴールは多彩な創作活動を展開しましたが、「歌を作ることは何にも代えがたい喜びである」と語っています。タゴールが作詞作曲した歌は二千曲以上に及び、「タゴールソング（ロビンドロ・シヨンギット）」と呼ばれています。

タゴールは、自然の中にあるリズム、メロディーをそのまま調べとし、神への祈りや愛、そして自然の美しさや調和を表現することで、「人生のヴェールを解き放つこと」を歌の理想としました。そして、「コタ（詞）」と「シュール（音律）」が互いを敬い強調することで、全てを包み込む創造性の調和を図らなければならないと語っています。タゴールが詩を作っていると、そのまま歌になつていったそうです。

また、イギリス統治下で独立運動が活発になると、祖国の自然などをうたったタゴールの歌は、多くの人びとに歌われました。そしてインドは一九五〇年（昭和二十五年）に、バングラデッシュは一九七一年（昭和四十六年）

に、タゴールが作詞作曲した歌を国歌と定めています。

《展示資料》

・『Gita Iekha Part I (歌の緒-I)』

大倉精神文化研究所附属図書館 エ1112

一九一八年（大正七年）に刊行されました。本書はタゴールソングの歌詞と楽譜です。インド音楽は口頭伝承によって受け継がれてきたため、基本的に楽譜は存在しません。これは、旋律等を確認するために作成使用されたようです。

④ 画家 タゴール

タゴールが、一九二四年（大正一三年）に一篇の詩を推敲して、ペンを走らせていると、塗りつぶしたところが繋がって、一枚の絵ができあがりました。これがきっかけとなり、タゴールは絵を描くようになります。彼は自らの絵について、綿密な写真ではなく「韻律^{リズム}に対する私の本能と、線や色の調和した結合に対する私の喜び」を表現していると語っています。

タゴールの絵は近代西洋画壇にも影響を与え、世界各国で展示会が開催されています。日本では、一九八八年（昭和六三年）西武美術館で「タゴール展」が開かれています。ここでは、当研究所が所蔵する画集から、タゴールの絵を紹介しました。

二 タゴールと日本

① 一回目の訪日（一九一六年・大正五年）

タゴールは、生涯に五度、日本の地を踏んで、著名人と会談したり、各地で講演したりしています。ただし、二度目の一九一七年（大正六年）二月と、四度目の一九二九年（昭和四年）三月は、船を乗り換えるために立ち寄り、数日間だけしか滞在していません。そのため、訪日の回数を「三回」とする意見もあります。

最初の訪日は一九一六年（大正五年）でした。アメリカから講演依頼が届いたタゴールは、日本を経由することを決めます。風光明媚で静寂な土地が多く、仏教芸術

タゴール 1916年の行程

5/29	神戸着。
6/1	神戸市の村山龍平宅を訪問。夕方、天王寺公園公会堂（大阪）にて、東京朝日新聞社主催の講演会。演題「インドと日本」。
6/2	高野山参詣を中止。翌3日の奈良見物、4日の京都見物も中止。報道関係者などが殺到したため。
6/5	早朝に神戸発ち、夕方に東京着。上野の横山大観邸に滞在（～6/13）
6/10	早稲田大学を訪問し、大隈重信と会談。午後、日本美術院にて講演。
6/11	東京帝国大学講堂にて、講演会。演題「日本に対するインドの使命」。
6/12	神田猿樂町の宝生能楽堂で能観賞。
6/13	上野寛永寺にて、日印協会主催のタゴール翁歓迎会。大隈首相以下、200余名が参加。
6/14	横浜へ。印度商会のヘムマル邸に滞在。
6/15	蒲田の菖蒲公園を散策。
6/16	姉崎正治、成瀬仁蔵らが来訪。
6/17	江の島、鎌倉を観光。夕方、グランドホテルにて、印度人協会主催の歓迎会。
6/18	滞在先を本牧の原富太郎別邸（現三渓園）の松風閣に移す。
7/2	慶應義塾大学大講堂にて、慶応・早稲田・日本女子大学校、日印協会など共催の講演会。演題「日本の精神」。夕方、日本女子大学校にて、同校主催の歓迎晩餐会。
7/11	吉田絃二郎や男女学生ら18名が来訪（三渓園）。
7/12	鶴見の総持寺を参詣。
7/13	洪沢栄一、婦人協会幹事として来訪。宗教問題・思想問題について会談。
8/2	箱根蘆之湯の原富太郎別荘へ。
8/16	飛鳥山の洪沢栄一別邸にて、午餐会。
8/17	軽井沢の日本女子大学校の三泉寮を訪問。
8/22	茨城県大津町五浦の天心邸を訪れ、天心の墓を詣でる。
8/25	五浦より帰京。横山大観邸に滞在。
9/2	横浜より離日。

典拠：「タゴール総年譜」（『タゴール著作集 別巻』所収）、柳生四郎「タゴールの足跡」（『さちや』19号所収）『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『読売新聞』など。

が栄えている日本で、ゆつくりと講演原稿を作成しよう
と考えたからです。

《展示資料》

・写真「日本女子大学創設者の成瀬仁蔵と」

沿革史資料 No.5153-30

一九一六年七月二日撮影。タゴールの著書に深い感銘
を受けていた成瀬仁蔵の招きを受けて、タゴールはこ
の日に日本女子大学校（現日本女子大学）をはじめて
訪問します。この日行われた講演会場には、宮沢賢治
の妹・宮沢トシの姿がありました。

・写真「軽井沢の三泉寮にて」 沿革史資料 No.5153-12

一九一六年八月撮影。タゴールは、八月一八日から二
日まで、軽井沢の日本女子大学校の三泉寮さんせんりょうを訪れて
います。この写真は、女子学生たちに瞑想の指導を
行っているところです。この中には、日本初の女性国
會議員・高良とみがいきました。

・写真「天心漁莊（現天心邸）の庭にて」

沿革史資料 No.5153-13

一九一六年八月撮影。タゴールは、八月二二日から二
五日まで、岡倉天心の墓参と静養を兼ねて茨城県の五
浦を訪れています。この写真では、タゴールが浴衣の
上に岡倉家の紋入り羽織をまといっています。天心の妻
基子から、お土産として贈られたものです。

・写真「岡倉天心の墓」

沿革史資料 No.5153-35

天心は五浦の景勝を大変気に入り、一九〇五年（明治
三八年）に邸宅を建て、一九一三年（大正二年）九月
に亡くなると、東京の染井霊園の墓から分骨されてい
ます。墓参したタゴールは、記念の松を植樹しました。

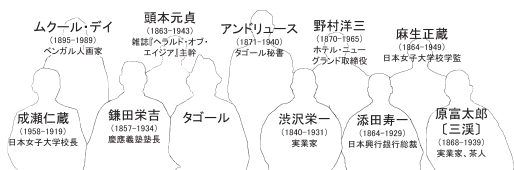
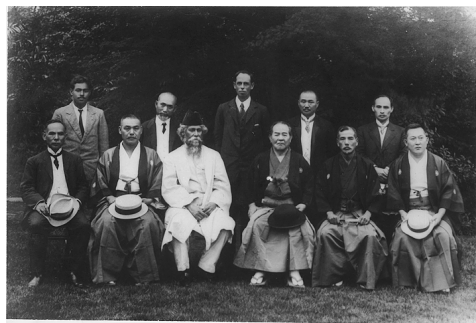
② タゴールと横浜

船旅で世界を廻っていたタゴールは、日本有数の国際
港である横浜の地をたびたび踏んでいます。最初の来日
では、実業家で茶人の原富太郎さんけい えんが作った三溪園さんけい えんに滞在し、
周辺の景勝名跡を観光しています。

《展示資料》

・写真「原富太郎（図）」

沿革史資料 No.5153-27



【図2】下の人名入りの輪郭図は、当研究所が三溪園保勝会編『三溪園』（神奈川新聞社、2006年）を参考に作成した。

一九一六年（大正五年）撮影。原をはじめ、横浜にゆかりのある人々と写っています。タゴールは三溪園を大変気に入り、京都や高野山、福井の永平寺などの観光予定をキャンセルし、日本滞在三ヶ月間のうち、二ヶ月近くを三溪園で過ごしました。

横浜市港北区内には、当研究所以外にもタゴールとゆかり深いところがあります。新羽町の善教寺です。^{にっぽ ぜんきやうじ}

同寺の住職を務めた平等通昭（通照）（一九〇三―一九九三）は、インド仏教文学とパリー語を研究しており、一九三三年（昭和八年）にインドへ留学し、タゴールから直接教えを受けています。

《展示資料》

・大倉邦彦宛平等通昭葉書 沿革史資料No.6137

インドから帰国した翌年の一九三五年（昭和一〇年）元旦に出された年賀状です。左上に「タゴール翁より宜しく申されました」と書かれています。

・平等通昭『タゴールの学園』

大倉精神文化研究所附属図書館 377.61
一九七二年（昭和四七年）四月に刊行されました。平等がインドのシャンティニケトンで体験したことをまとめたものです。彼は一九六二年（昭和三七年）に、タゴールの教育理念に則って新羽幼稚園を設立しています。

③ 三回目の訪日（一九二四年・大正一三年）

三回目の訪日では、タゴールは精力的に講演を行って
います。

《展示資料》

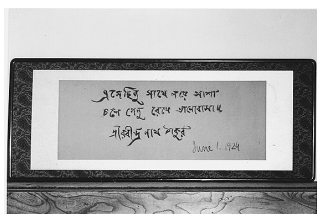
・写真「九州ホテルにて」〔図3〕 沿革史資料No.15321

一九二四年（大正一三年）五月三十一日、タゴール一行は上海を経由して長崎へ上陸し、雲仙の九州ホテルに宿泊しました。一九六一年（昭和三十六年）一〇月、同ホテル前庭に、タゴール生誕百年を記念して「タゴールの碑」が建立されています。

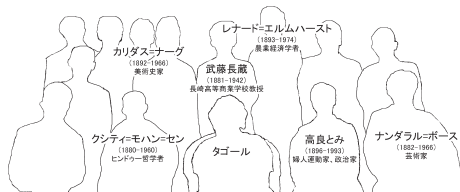
・写真「タゴール直筆の額」〔図4〕

沿革史資料No.15327

タゴールが宿泊した福岡市の旅館・栄屋旅館にあった書額です。一九二四年六月一日の日付が書かれています。一九六〇年（昭和三五年）、東京大学法学部に留学していたインド人A・サーカルが、九州を旅行している際に偶然発見し、撮影したものです。



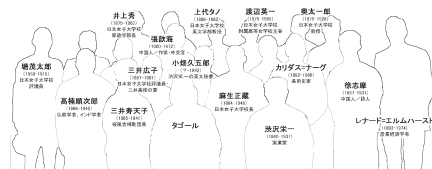
【図4】



【図3】 下の人名入りの輪郭図は、当研究所が『タゴール』第2号（長崎タゴール研究会、1960年）を参考に作成した。

（日本語訳）

高き希望に満ちてわれこの国を訪いぬ、わが愛を返礼としてわれこの国に遺さん



【図5】 下の人名入りの輪郭図は、当研究所が日本女子大学成瀬記念館などの教示を基に作成した。

・写真「日本女子大学校にて」【図5】

沿革史資料No.515316

一九二四年六月一〇日、日本女子大学校の講堂で学生に講演を行った際に撮影されたものと推定されます。一二日には、タゴールは渋沢栄一の招きを受けて東京・飛鳥山の暖依村莊を訪れ、琴や三味線、尺八などの演奏を聴きました。

④ 三回目の訪日からの帰途

三回目の訪日を終えたタゴールは帰国の途に就き、中継地のペナンで客船「佐渡丸」に乗り換えています。二〇一二年（平成二四年）頃、佐渡丸の船員のひ孫の自宅で、タゴールらと共に写っている写真や水墨画が見つかりました。タゴールは、佐渡丸の船員たちと英語で会話をしていたようで、インドの地図を書いたメモや英文の詩などもありました。これらの資料は当研究所に寄贈されました。

※ この寄贈資料については、小田真裕「大正十三年（一九二四）のタゴール来日について―第二十九回研究所資料展の報告を兼ねて―」（『大倉山論集』第六十二輯、平成二八年三月）を参照。

《展示資料》

・写真「佐渡丸にて」

沿革史資料No.123622

一九二四年七月一七日撮影。帰国途中のタゴール一行と、佐渡丸の船員たちの記念写真です。写真の裏側には、写真に写っている十二名の名前と撮影の時期が記

されています。

・水墨画（タゴールのサインあり）

沿革史資料No.12382-1

タゴールは、岡倉天心・横山大観・菱田春草・荒井寛方といった日本画家とも親交を結び、インドへ招聘もしています。この水墨画は、タゴールが水墨画に関心が深く、自らも筆を執っていたことを示す貴重な資料です。

・タゴールの詩

沿革史資料No.12382-3

鉛筆で書かれた英文によるタゴールの短詩です。遠く離れても変わらぬであろう友情を、船上から見える風景に擬えています。

・メモ

沿革史資料No.12382-5

日本郵船会社用便箋が使用されています。左の表面には、タゴールの名前と生家の所在地、ボースの名前が書かれています。右の裏面にはインド周辺地図が描かれています。

三 タゴールと大倉邦彦

① 五回目の訪日（一九二九年・昭和四年）

タゴールは、日本を経由してカナダとアメリカの大学へ向かいます。そしてカナダでの講演を終えロサンゼルスに到着したところ、アメリカへの入国を拒否されました。役所の対応に憤慨したタゴールは、予定をすべてキャンセルして、日本にしばらく滞在することに決めます。

タゴールはラス・ビハリ・ボースに滞在先の手配を依頼し、「富豪の大邸宅での形式的な歓待よりも、むしろ思想的に気分の分り合える人がよい」と伝えました。そこでボースは、親交のあった大倉邦彦に頼み、タゴールは大倉邸に約一ヶ月間滞在することになります。

タゴール 1929年の行程

5/10	横浜着。山下町のテーカムダス商会に宿泊。
5/11	東京の帝国ホテルに宿泊。同ホテルで、大倉邦彦と面会し、大倉邸の滞在を決める。
5/12	芝増上寺本堂にて、歓迎会。夕方、東京朝日新聞社講堂にて、同社主催の連続講座「有閑哲学」1回目。
5/17	水戸高等女学校（現水戸二高）にて、講演。
5/18	持病が悪化し、東北や関西での公演予定を中止し、6/9に帰国することを決める。午後、青山の大隈信常邸を訪問。邦彦、間島與喜、副島道正、藤山雷太、安川勇之助、渡邊海旭ら同伴。
5/19	午前、JOAKにて、ベンガル語の詩の朗読の放送。午後、大倉邸にて、留学生らとの交流会。
5/21	夕方、東京朝日新聞社講堂にて、同社主催の連続講座「有閑哲学」2回目。
5/22	夜、日本青年館にて講演
5/24	夕方、東京朝日新聞社講堂にて、同社主催の連続講座「有閑哲学」3回目。
5/25	ラース・ビハリ・ボースと会う。
5/26	芝白金の藤山雷太郎にて、茶話会。
5/27	正午、狭心症の発作。夕方、東京朝日新聞社講堂にて、同社主催の連続講座「有閑哲学」4回目。タゴール本人は病気のため登壇せず、秘書オブルボクマル＝チョンドが原稿を代読。
5/28	医師から、2、3日の安静が必要と診断される。予定していた東京帝国大学（29日）、慶應義塾大学（30日）、早稲田大学（31日）の講演を中止する。
5/29	夕方、東京朝日新聞社講堂にて、同社主催の連続講座「有閑哲学」5回目、終了。この日も秘書が原稿を代読。
6/3	飛鳥山の渋沢栄一別邸にて、婦一協会主催の歓迎茶話会。
6/5	歌舞伎鑑賞。邦彦、渡邊海旭、ビハリ・ボース、相馬愛蔵夫婦も同伴。
6/7	横浜で、インド人たちの歓迎を受ける。
6/9	横浜より離日。

典拠：白田雅之「タゴールと大倉邦彦」（『大倉山論集』第58輯所収）『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『読売新聞』など。

《展示資料》

・写真「ラス・ビハリ・ボース」(『インドの叫び』口絵)
大倉精神文化研究所附属図書館 2020ホ

・ボースの一九三一年(昭和六年)の年賀状

沿革史資料No.00503

インド独立運動家のボース(一八八六―一九四五)は、一九一五年(大正四年)六月にタゴールの親族と偽って日本へ亡命しました。しかし、日本政府が国外退去を命じたため、ボースは新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻にかくまわれます。その後、夫妻の娘俊子と結婚し日本人に帰化したことで、彼は「中村屋のボース」と呼ばれました。邦彦との交流が始まった時期やきっかけは不明ですが、当研究所にはボースからの手紙や葉書が数通残っています。

② タゴールの大倉邦彦邸滞在

タゴールが大倉邦彦邸での滞在を決めた要因の一つに、邦彦の著書『感想』の英訳を読み、その思想内容に共感していたことがあったようです。邦彦は、進めていた研究所の設立計画を書斎でタゴールに熱く語った、と回顧

タゴールの大倉邸での過ごし方

4:00 起床～ 瞑想	起床後、朝食の8時まで瞑想。 この間、室外には一歩も外に出ず、また何人も部屋に入ることは出来ませんでした。大倉邦彦の秘書・原田三千夫によれば、時々室内を歩く足音が聞こえたそうです。 また、前夜に、「バナナ」「クリーム」「卵」が寝室に運ばれ、瞑想中に全てたいらげたとのこと。
8:00 朝食	朝食は洋式であって、原田三千夫が毎朝、居間に運んでいました。材料は、新鮮なものが新宿中村屋から届けられました。タゴールは当時70歳でしたが、その食欲はなかなか旺盛であったようです。
午前	来客を避け、居間のソファに坐して、原稿を執筆したりしていました。その合間には、「コンサイス・オックスフォード辞典」を手にして見入ったりしていたようですが、それ以外の読書はしていなかったそうです。
午後	朝日新聞社で「有閑哲学」という題で連続講演をしたり、各地へ講演に出かけたりしました。 夕食は、家の手料理が主で、時々、外で日本独特の食事をしていました。

しています。この時のタゴールとの交流を通して、当研究所の理念「東西文化の融合」は深化していきました。

《展示資料》

・写真「目黒の大倉邦彦邸」

沿革史資料No.6878

現在の目黒区三田にありました。邦彦は、洋式の寝室と書斎兼居室と浴室をタゴールに提供し、手料理を作ってもてなしました。

・写真「大倉邸での交流会」

沿革史資料No.6878／沿革史資料No.82141

／沿革史資料No.68469

一九二九年（昭和四年）五月一九日撮影。邦彦は、自身が世話をしていた学生寮の学生を中心に、フィリピンや中華民国の留学生約五十人を自邸に招きました。若者との語らいを好むタゴールは、交流会に喜んで出席し、半日を楽しそうに過ごしたそうです。

・タゴール「別れの詩」

沿革史資料No.1260356

タゴールが帰国前日の六月八日に関係者へ配布した挨拶状です。詩はタイプで印刷されていますが、ベンガ

ル語のサインはタゴールの自筆です。

・『富士見日曜学校の会報 No.一四』一九二九年（昭和

四年）六月一二日

沿革史資料No.6946

大倉邦彦が主宰していた富士見日曜学校は、富士見幼稚園の卒園者を対象とした勉強会です。会報のNo.一四（一八（昭和四年六月一二日）九月一九日）にかけて「タゴール翁の学校設立の言葉」が翻訳連載されています。富士見幼稚園の教育理念が、タゴールの影響を受けていたことが分かります。

③ タゴールからの贈り物

タゴールは大倉邸に滞在中に体調を崩し、医師からは肺水腫・下腹部浮腫・軽い狭心症と診断されました。邦彦らから手厚い看病を受けたタゴールは、帰国後にお礼を贈っています。この他にも、当研究所には、タゴールからの贈り物が多数残されています。

《展示資料》

・写真「モデル・シップ」〔図6〕

沿革史資料No.12690

タゴールから贈られたインド古代船の模型船です。一九五九年（昭和三四四年）に当研究所を訪問した、タゴールの義孫であるクリシュナ・クリパラニーの指摘によって、「ファミリー・ボート」であることが分かりました。

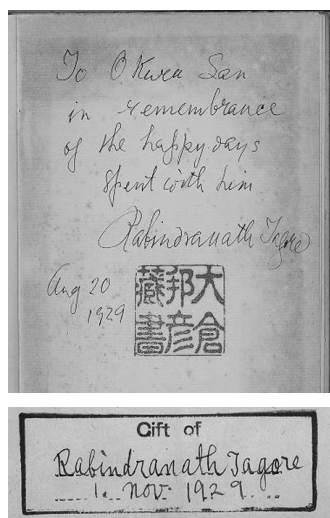


〔図6〕

・タゴール文庫〔図7〕

大倉精神文化研究所附属図書館分類番号…エ1

タゴールは帰国後、滞在中に手厚い看病を受けたことに感謝して、ベンガル語の自著百三十冊と英語の自著二十九冊、計百五十九冊すべてにサインを記して、邦彦へ送りました。のちにタゴール記念会が収集した図書と併せ、現在、タゴール文庫として附属図書館に収蔵、公開しています。



〔図7〕 ベンガル語版『ギタンジヨリ』の見返しにある邦彦への自筆メッセージ（上）とタゴール自筆の献本サイン

・外国人サイン帖 [図8]

沿革史資料 No. 6499

大倉邦彦は、研究所設立に先立ち、欧米の図書館事業や宗教界・教育界の視察するため、一九二六年（大正一五年）にヨーロッパへ赴いています。それ以来、出会った外国の著名人にサイン帖へメッセージを書いてもらっていました。タゴールには、自邸に滞在している間にサインしてもらっています。

Man must seek freedom from his own self not by ignoring its claims but by harmonizing them with the spirit of the eternal, not by breaking the walls of his house but by opening its windows, and uniting the limited space of his room to the spece of the limitless light.

Rabindranath Tagore

27 May 1929

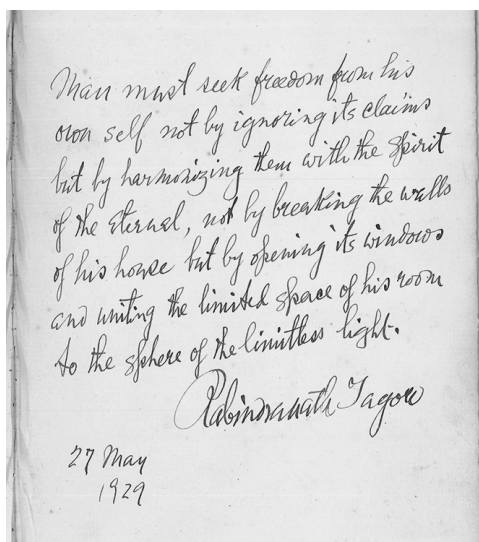
(日本語訳)

人は自分自身からの自由を希求せねばならない、それは自分の要求を無視することによってではなく、

それらの要求を神の御心と調和させることによって、そして自分の家の壁を壊すことによってではなく、その窓を開いて、自分の部屋という限られた空間を無限の明るさを持つ天空に結合させることによって、これを行うのだ。

1929年5月27日

ラビンドラナート タゴール
(日本語訳：中島志郎)



【図8】

・タゴール書状（ギフト札）

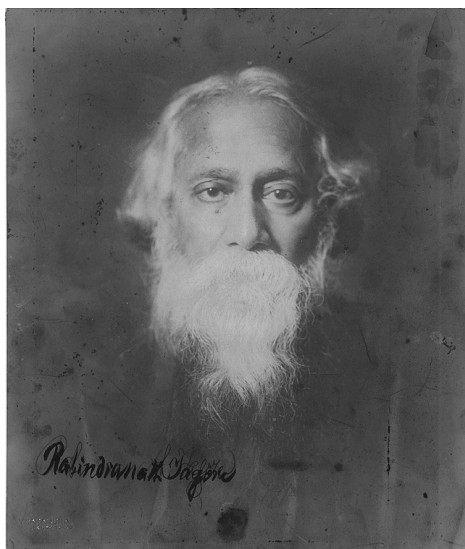
沿革史資料No.8174

一九三一年（昭和六年）二月四日付。タゴールが約一年にわたる長期旅行からインドに帰国すると、邦彦からのプレゼントが届いていたようです。そのお礼状です。

・写真「タゴール肖像」〔図9〕

沿革史資料No.8175

左下に、タゴール自筆のサインが記されています。



〔図9〕

④ 日印友好交流の「コマ

タゴールは、日本の文化風物をこよなく愛し、インドに移入したいと考え、日本から様々な分野の指導者を招きました。邦彦は茶道と生け花、そして柔道の分野において橋渡しを担っていました。

《展示資料》

・橋本真機子『印度襟記』

大倉精神文化研究所附属図書館 E11/164

筆者の橋本^{はしもとまきこ}真機子（旧姓…星）は、中村屋の相馬夫妻の姪にあたります。この本は一九四二年（昭和一七年）に三教書院から刊行されました。橋本は一九三〇年（昭和五年）一〇月にインドへ渡り、約三年間、現地で茶道と生花の普及に努めました。この本は、彼女のインド体験をまとめたものです。

・「シャンチニケータンと私」（『さちや』第十四号収録、一九六〇年（昭和三五年）二月一日）

沿革史資料No.6892

橋本は渡印の背景について、「ここまで具体的に内外

の話を選んだのは私の伯父母、新宿中村屋の創始者相馬愛蔵と黒光夫妻だが、その義子ラス・ビハリボース氏や大倉邦彦氏の御尽力だったのだと思う」と回顧しています。

・『東京日日新聞』記事 一九二九年（昭和四年）六月一〇日付 沿革史資料No.1260336

タゴールから「柔道の教師」の要請を受けた邦彦が、講道館柔道の創始者嘉納治五郎に相談し、高垣信造たかがきしんぞう（一八九八～一九七七）のインド派遣が決定しました。

・大倉邦彦宛高垣信造書翰 一九三三年（昭和八年）一月一日付 沿革史資料No.21079

高垣が、インドのタゴール大学での任期を終え、アフガニスタン政府の招聘を受けたことを伝えています。戦後も、高垣はビルマ、インドネシア、スマトラなどのアジア諸国、そしてアルゼンチン、ブラジル、ペルー、メキシコ、キューバなどの南米諸国にも渡り、柔道の指導を行っています。

・『The Techniques of Judo』 大倉精神文化研究所所蔵

高垣が一九五七年（昭和三二年）に Harold E. Sharp と共著で刊行した、世界で広く普及している柔道の入門書です。柔道の技を写真入りで説明しており、今も版を重ねています。高垣は、柔道の国際化に多大なる功績を残しました。

四 タゴール記念会

① タゴール記念会

一九六一年（昭和三十六年）のタゴール生誕百周年に向けて、インドでは、国家事業として百年祭が計画されます。そして、インド首相のネルーが、世界規模で記念されるべきであるという趣旨で、世界各国に百年祭への協同を呼びかけます。

ネルーのこの呼びかけに応じて、日本では、タゴール記念会が一九五八年（昭和三十三年）一〇月に発足します。大倉邦彦が理事長に就任しました。

《展示資料》

・タゴール記念会会員申込ハガキ 沿革史資料No.5174
送付先である記念会本部の住所が、大倉山文化科学研究所（現大倉精神文化研究所）になっています。

・タゴール記念会の会員名簿類 沿革史資料No.5175
会員には、年会費六百元（月五十円）の正会員、年会費二千円の特別会員、一口五千円以上の会費を納めた賛助会員の三種類がありました。

・『タゴール記念会会報1』 沿革史資料No.5174
一九五九年（昭和三十四年）一月刊行。タゴール記念会発足に伴い、広く入会を呼びかけるために作られた冊子です。趣意書、会則、入会規則、関係者のタゴールとの思い出などが収録され、半年後には、内容を簡略化した英文パンフレットも発行されています。

・タゴール記念会日誌 沿革史資料No.5175
一九六一年一〇月九日条には、十一月開催のタゴール展覧会についての相談内容や、二日前に行われた大阪百年祭のことが書かれています。

② タゴール記念室

横浜市大倉山記念館三階の一室は、かつて「タゴール研究室」と呼ばれていました。理事長に就任した大倉邦彦が、タゴール記念会への提供を申し出たからです。

タゴール研究室内に記念会本部が置かれ、会員による研究会などが行われました。また、タゴールが邦彦に贈った自著などが自由に閲覧できました。

《展示資料》

・研究所の処務日誌（抄） 沿革史資料No.1362
タゴール研究室は、一九五八年（昭和三十三年）一〇月一日、大倉精神文化研究所の当時「二階特別閲覧室」と呼ばれていた部屋に設置されました。横浜市大倉山記念館の三階にある第二閲覧室か第三会議室のどちらかであったと言われています。

・タゴール記念会金銭出納帳 沿革史資料No.24625
表紙には「タゴール記念会」の角印「図10」とともに、「タゴール研究室」のゴム印「図11」が押されています。



【図10】

横浜市港北区大倉山
大倉山文化科学研究所内(電網島五〇)

タゴール研究室
タゴール記念会本部

【図11】

・「大倉山のタゴール研究室」(『タゴール記念会 会報

1』一九五九年一月)／『さちや 第六号』一九六〇

年(昭和三五年)四月) 沿革史資料No.21に

タゴール研究室について、邦彦とタゴールとの関わりも交えて紹介しています。タゴールに関するあらゆる資料を集めて、研究室をタゴール研究のセンターにしようとして計画されていました。

③ タゴール記念会の出版物

記念会は、タゴールの思想や功績を顕彰・普及するため、国内でさまざまな記念行事や研究会などを行い、機関誌を発行しました。また、記念出版物として、生誕百年記念論文集『タゴール』と回想録『タゴールと日本』を刊行しています。当時の首相・池田勇人がインドを親

善訪問した際、コルカタ(当時はカルカッタ)のタゴール生家を訪れ、この二冊を寄贈しています。

《展示資料》

・タゴール記念会訳編『タゴール生誕百年祭記念論文集』 沿革史資料No.7047

一九六一年(昭和三十六年)五月六日刊行。著名なタゴール研究者から新進の研究者まで、十六名の論文が掲載された記念論文集です。巻末には、タゴール文献目録も所収されています。

・タゴール記念会記念論文編集委員会編『タゴールと日本』 沿革史資料No.8173

一九六一年五月六日刊行。タゴールが一九一六年(大正五年)に日本を訪れた際の旅行記「日本への旅」と、同年に日本女子大学の三泉寮で行われた講演「瞑想」が翻訳されています。

・タゴール記念会機関紙『さちや』 沿革史資料No.7047
一九五九年七月の第一号から、一九六二年(昭和三十三年)三月の第二十二号まで発行されました。第一号の

タイトルは「タゴール記念会月報」でしたが、機関紙名についてアンケートを取った結果、第二号から「さちや (sachya)」（日本語訳「真実」）に変更されました。タゴールの思想や作品紹介、研究の現状などを伝えるとともに、生誕百年祭の意義や記念会の活動報告が掲載されました。

・タゴール著、稲津紀三・山口清編『My school & an Eastern University: Essays』

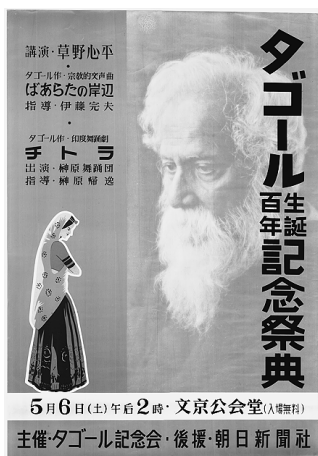
大倉精神文化研究所附属図書館蔵 289.1
一九五九年（昭和三十四年）四月五日刊行。大学の授業用テキストとしての利用を目的に刊行された英文シリーズの第一集です。内容は「教育論集」で、第二集『Sādhana: the realisation of life (サーダーナー…生の実現)』も刊行されています。

④ タゴール生誕百年祭

タゴール生誕百年祭は、快晴に恵まれた一九六一年（昭和三十六年）五月六日、東京の文京公会堂で盛大に執

り行われました。タゴールの精神を現代に顕彰するとともに、日本で行われたインド文化の祭典としても、国内外に大きな反響を与えました。

第一部「記念祝典」では、日印両国の国歌斉唱で開会し、理事長大倉邦彦の挨拶、外務大臣やインド大使など来賓の祝辞、詩人の草野心平による講演などが行われました。ひきつづいて行われた第二部「祝祭」では、築地仏教聖歌合唱団による、タゴール作の宗教的交声曲「ばあらたの岸辺」の合唱、榊原舞踊団によるタゴールの戯曲「チトラーンガダー」が上演されました。



【図12】

《展示資料》

・ポスター〔図12〕

沿革史資料No.8127

・パンフレット

沿革史資料No.5156

・写真「挨拶をする大倉邦彦」

沿革史資料No.6863-2

邦彦は、生誕百年祭の意義は、「偉大なる業績を称える回顧に止まらず、更に現代の課題の解決のため、タゴールの深い精神」をよみがえらせることにある、と挨拶しています。この時壇上に掲げられたタゴールの肖像画は、現在、附属図書館の書庫に保管されています。

・写真「記念講演をする草野心平」沿革史資料No.5153-38

詩人の草野心平（一九〇三～一九八八）は、一九二四年（大正一三年）に九龍（現中国香港特別行政区）の船上でタゴールに会っており、「ただ魅了されただけだった」と語っています。

・写真「榊原舞踊団による戯曲「チトラーンガダー」

沿革史資料No.6863-6

榊原舞踊団は、榊原婦逸が創設した、アジア全域の古

典、民族舞踊をレパートリーとした舞踊団です。榊原は、日本人舞踊家として初めてインドへ留学した人物です。

⑤ 大倉邦彦と武者小路実篤

一九六〇年（昭和三五年）五月二一日、タゴール記念会が開催した生誕九十九年記念特別講演で、武者小路実篤が登壇しています。実業家の邦彦と小説家の実篤。異なる分野で活躍した二人を結びつけたのは、タゴールの存在でした。

《展示資料》

・写真「講演する武者小路実篤」沿革史資料No.1966-1-5

演題は「東洋人の一人として」でした。実篤は、『さちや』第二号に掲載した文章「タゴールの顔」で、タゴールの顔には「無比な上品さ、優美さ」が表れている、と述べています。

・日誌（大倉精神文化研究所）

沿革史資料No.2405

一九三一年（昭和六年）四月一五日、タゴールの秘書

から大倉邦彦に、タゴール生誕七十周年の記念誌を執筆する「日本ノ代表的哲学者・詩人及ビ小説家」を推薦して欲しいと連絡があったことが記されています。邦彦は、井上哲次郎、野口米次郎、そして実篤を推薦しました。

(日誌の文章)

タゴール翁誕生記念出版寄贈者推薦

四月十五日、タゴール翁秘書 Chakravarty 氏ヨリ別紙書状ヲ以テ、タ翁誕生七十回ヲ記念スル Birthday volume ニ寄稿スル日本ノ代表的哲学者・詩人及ビ小説家ノ推薦ヲ依頼シ来ル。

詩人トシテ野口米次郎氏、小説家トシテ武者小路実篤氏ヲ推シテ承諾ヲ得タリ。野口氏ヨリハ英文ノ詩稿ヲ得テ、五月十三日之ヲ発送シ、武者小路氏ノ原稿ハ慶応義塾教授西脇潤三郎氏ニ翻訳ヲ依頼セリ。哲学者トシテハ初メ京大ノ波多野〔精一…筆者注〕博士ヲ推薦セシモ、同氏ノ都合ニヨリ承諾ヲ得ズ。井上哲次郎博士ヲ煩ハス事トナル。井上博士ノ原稿

ハ岡倉由三郎氏ニ英訳ヲ依頼シテ承諾ヲ得タリ。両者ノ原稿ハメ切切迫シテ五月廿一日発送セリ。

・大倉邦彦肖像画〔図13〕

沿革史資料 No.11002

実篤が描いた邦彦の肖像画です。タゴールの秘書から依頼を受けた一ヵ月後の五月一日、実篤は大倉山を訪れ、邦彦が建設中の大倉精神文化研究所を案内しています。この絵の裏に「大倉邦彦兄肖像一九三一・六、一五 武者小路実篤 画く」とあることから、ちょうど一ヶ月後の六月一日に完成したことがわかります。



【図13】

・『THE GOLDEN BOOK OF TAGORE (タゴールの黄金の書)』
沿革史資料No.8423

一九三一年タゴール生誕七十周年の記念事業として刊行された書籍で、ガンディーやアインシュタインら著名人のメッセージが収録されています。実篤は日本の小説家代表として寄稿文を寄せています。

(武者小路実篤の寄稿文)

Some would wonder why I am an optimist. Pessimism is right if one considers only the destiny of an individual. Optimism is inevitable if one is able to feel the eternal truth of the human will. Aenormous tree, even if told that it will be dried up and dead some few hundred years hence, cannot but sing its own joyous song, praising life and growing upwards towards the heavens.

J.MUSHAKOJI

(日本語訳)

私が楽観主義者ではないかと不思議に思う人がある

かもしれません。悲観主義は、個人の運命だけを考えるならば正しいでしょう。楽観主義は、人間の意志の永遠なる真実を感じることが出来るのならば必然的なものでありましょう。巨木も、数百年経てば枯れ果ててしまうとはいえ、生命を讃え、天に向かって生長しながら、その歓びの歌を歌わずにはいられないのです。

五 タゴールからのメッセージ

《展示資料》

・タゴール自筆の詩 [圖14]

沿革史資料No.10727

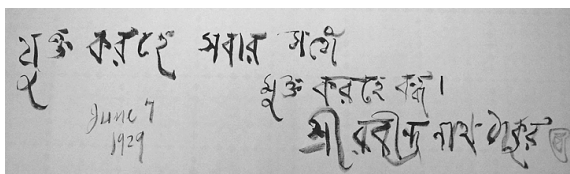
一九二九年(昭和四年)六月七日、大倉邸に一ヵ月にわたり滞在したタゴールが、帰国に際して大倉邦彦に託したメッセージです。邦彦は書を嗜んでおり、その影響を受けて、タゴールが墨筆で書いたと考えられています。『ギータンジャリ』に収録されている詩の一節がかかれています。

(日本語訳)

すべての人をひとつにしてください、束縛から解き放してください

6月7日 1929

ラビンドラナート・タゴール印

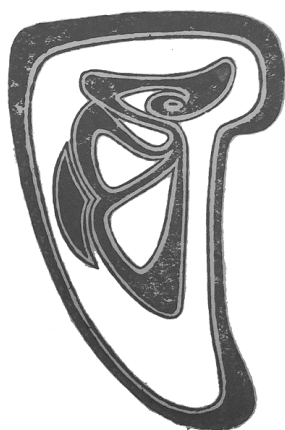


【図14】

・タゴール愛用の印章【図15】

沿革史資料No.6894

タゴールの著作や画集には、この押印がたびたび見られます。これは大倉邸に滞在している間に、タゴール自らが彫刻したものです。自分の名前の文字をデザインしています。



【図15】

・写真「沙羅樹の並木に立つタゴール」

沿革史資料No.6863-25